

資本主義の生成
～封建制から資本主義への移行理論～

泉 宏明

1. 序

本稿の目的は、次の定理を構築することにある。

主定理 「農耕社会における一元的生産様式から多元的生産様式への自由放任主義的移行は、一定の交換経済が領主・農民層へ浸透したところに、穀物が過剰生産となり市場機構が作動したことによる。」

今までの経済史を概観すると、日本でいうならば近世と近代のつながりが今一つ明確でなかった。明治維新をめぐる絶対主義革命かブルジョア革命かという論争においても、その下部構造、特に農民の位置づけが明確でない。マルクス歴史学を離れると、歴史において体系的理論を持つ学派は少ない。「一つの非共産主義宣言」としてロストウが、離陸(ティク・オフ)という概念を用い、経済成長論を展開したが、実質的に有効な歴史法則はなく、あまり有効な考え方もないように思える。

本稿では、主定理の歴史理論的側面の説明と実証を行っていく。

2 定義および論理

2. 1 一元的生産様式

同一効用物（ここでは穀物）しか生産されていないようなモデル社会。同質物と同質物の間では交換は起こらないので、自己生産自己消費型社会にならざるを得ない。

2. 2 多元的生産様式

多くの効用物が生産されている社会。理論的には、異質な効用物の間で交換が行われている社会と、多くの効用物を自らがすべて生産し消費する自己生産自己消費型の社会が考えられるが、生産性の限界の中で、後者は現在においては、非現実的である。

2. 3 歴史の変化

マルクス歴史学は、生産力の増大による生産手段の所有関係の変化、階級闘争を歴史の重要なポイントだとする。しかし、生産力が増大するとなぜ歴史が変わるのかを明確にしていない。この点において、本稿では、生産力が増大すると、異質な効用を持った生産物が増していくという考え方方に立つ。これが、農耕社会の一元的生産様式から多元的生産様式への発展という理論であり、このことは、一元的生産様式、多元的生産様式の項で示したとおり、自己生産自己消費型の社会から交換経済の社会への変化の歴史である。

2. 4 集計量

自己生産自己消費の経済と交換経済はそれぞれ単独で存在していたのではなく、混在して社会体制を構築していた。それぞれどちらがどのくらいウェートがあったかをはかるた

めに、どのような効用物の生産の上に生活しているかで人間を振り分け、その人口を集計量としていく。例えば、同一効用物へ人口が集中していれば、自己生産自己消費の経済のウェートが大きいだろうし、多くの効用物に人口が分散していれば、交換経済のウェートが大きいだろう。

2. 5 穀物の過剰生産の存在

一元的生産様式の経済のウェートが大きいときは、人口が穀物生産に集中していた。それが、多元的生産様式に移行するに従って、人間が穀物の生産から、他の部門への生産へ移動していった。それは、穀物の生産性の向上による穀物の過剰生産が生じたからである。その過剰生産により、他の生産物の生産に移動することのできる過剰労働が発生する。このため、穀物生産から新たな生産への人口移動が急速に起きた時期には、特に大きな穀物の過剰生産が存在した。

2. 6 市場機構の役割

古典派経済学は、市場機構において「セーの法則」が成り立つと考えたり、資源の最適分配が行われると考え、市場機構の、そして自由放任主義の有効性を強調した。本稿では、市場機構を、自由放任主義交換経済のマクロ動学の中心だと考える。すなわち、歴史において、多くの人が農耕生産から他の新たな生産への移動を行ったが、なぜ人は農耕生産をやめ、新たな生産へと短期間に同じように移動していったのだろうか。また、なぜそれが持続したのであろうか。結局、そこに何等かの強制力があったからであろう。その強制力とは、穀物の過剰生産による相対価格の低落であり、低い相対価格の持続だったであろう。これらが市場機構の役割である。

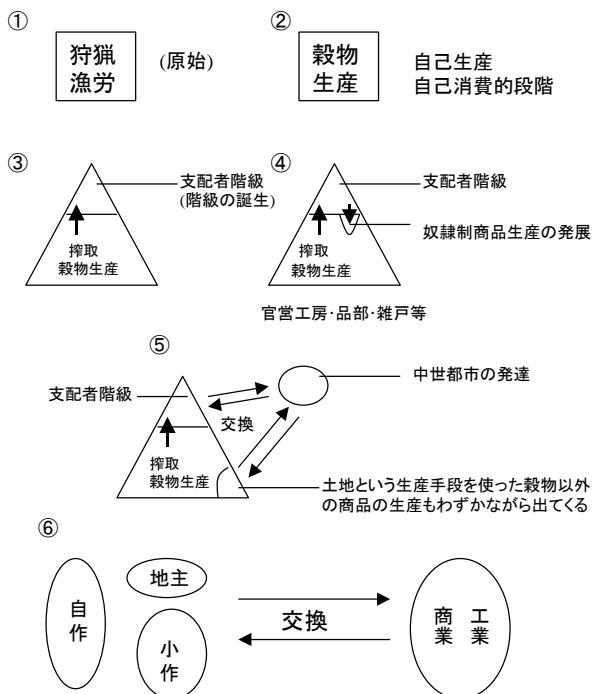


図1 歴史の変遷

3 歴史の変化その1 (農耕社会)

1. 人間の歴史は、狩猟・漁労生活から始まった。
 2. 次第に、より安定した農耕社会へ移っていき、そして、規模の経済が有効な範囲で共同体が成立する。
 3. その共同体の中で穀物の余剰ができ、また地域的に不均等な生産力の中で階級が成立してくる。
 4. そして、支配階級が、支配階級自身の消費物以外の穀物を、一部の被支配層に与えることにより、穀物生産以外の生産が行われるようになる。(奴隸制商品生産の発展)一方、支配階級はこの時代の基本的生産手段であるところの土地を生産に有効な範囲のすみずみまで支配していき、支配を完了していく。(しかし、このことは土地再分割闘争を妨げない。)そして権力の世襲が行われ、それによって序列が決まり支配階級内部の身分制が確立してくる。(土地を媒介とした支配階級内部の法秩序)
 5. さらなる穀物の余剰生産の中で、商人・手工業者・職人等の独立した存在が可能となり、奴隸制商品生産が交換経済の中で払拭されていく。そして交換が頻繁に行われるにしたがって、物と物とを直接に交換することに代わり、交換の媒介に貨幣が使用されていく。(中世都市の発達)その需要者はやはり支配階級が中心であるが、少しづつ農民の内部にも交換経済が浸透していく。ここにおいて、「独立」とは「生産手段の私有」を含むが、これは、交易圏の拡大と需要の拡大によって独立できた。多くの人間が必要とするから、権力に干渉されずに生産できる。このことは、需要の拡大を可能とする生産力の増大による交換のための穀物または土地という生産手段を使った農作物が、支配者の下部にまでまた農民にまで残っていることを必要とする。
 6. しかしながら、ここまで時代はやはり穀物生産の比重が圧倒的であり、ほとんどの人間は穀物生産に従事している。それはとりもなおさず、土地を離れて生活することができないということであり、それゆえ、土地を支配しているものが、この時代の生活を支配しているものであるということである。本格的な多元的生産様式への移行は、次の市場機構の作動による農民の新たなる生産物の生産への強制的移行によって始まる。
- さらなる穀物の過剰生産の中で、交換における市場機構が作動し、穀物の交換価値が低下してくる。それにより、穀物を財政基盤とする領主たちは困窮していく。と同時に農民も困窮していく。そして領主たちの実質的地位が低下し、新たな生産手段の所有者の地位が向上してくる。これに対する領主たちの政治的対応はさまざまである。日本の江戸時代のように農民を身分制(この身分制は前に書いた支配階級内部の身分制とは違い、新たな生産手段の所有者の伸張の中での全人民に対するもの)で土地に縛りつけることによって農耕社会を維持しようしたり、イギリスの一部の貴族のように土地を囲い込み新たな生産であるところの牧羊を始めたり等である。
- そして、穀物だけでは領主は家臣を養うことができなくなる。つまり、権力構造を維持できなくなる。

このようにして、領主が全体的に没落していく中で、（しかし、ブルジョアジーがとつてかわるほどではない）領主の中でもっとも強い者（君主等）が支配を強めていく。（絶対主義の時代）しかし、次第にブルジョア（新たな生産手段の所有者）の力が強くなる中で君主はそれに同化せざるを得ない。もし同化しなければ、ブルジョア革命と呼ばれるものが起こる。ただ交換経済の影響を受けて困窮し続けている農民の参加が、ある程度、革命の性格を規定していく。例えば、フランス革命は特徴的である。

4 歴史の変化その2

自由放任主義経済以降第二次世界大戦までの経済、それは農業、特に穀物の生産力の増大による工業への移行の時期であった。そして、穀物および土地という生産手段を使った農作物の生産から別の新たな商品の生産への、移行の遅れ、これがこの時代の変化を引き起こしていく。以下に、いくつかの例を見てみよう。

1. 世界大恐慌

1929年10月、アメリカの株式相場の暴落から始まる世界大恐慌の1年前、1928年末において、東ヨーロッパ、カナダ、オーストラリア、中南米、アジア諸国で農業恐慌が起こっている。アメリカにおいても、1929年の夏に農作物価格の低落が起こっている。このような農作物の過剰生産による農業恐慌の上に、需要の減退による工業部門の恐慌が重なって生じたのが世界大恐慌である。世界的な農作物過剰、それに従事している人間の過剰の中で、新たな商品の生産へと移っていかなければならないのだが、その移るべき工業部門において恐慌が起こったことにより、まったく不況解決の道が閉ざされてしまったのである。

2. ファシズム

この時代の貧困、それがファシズムを起こしていく。ファシズムは最初、イタリア、ポーランド、ユーゴスラヴィア等の後進農業国において発生する。そして、ドイツでも発生した。また、日本においても、農本主義とファシズムの関係はよく知られている。自らが受けている体制の矛盾、その原因、解決の方向が見いだせなかつた層、それがファシズムの民衆の中の支持なのである。従つて、ファシズムとは、体制矛盾の中で、体制内変革または体制自体の変革の道が見いだせない層に、自我の共同が起つて、それが民族のエゴへと変化したものと定義することができるだろう。例えば、ドイツにおいては、社会民主党さえその矛盾の解決の方向をはっきりと明示できなかつた。日本においては、社会民主主義者と共産主義者の間での論争の中で、現状規定、解決の方向を見いだせなかつたのである。

3. 社会主義革命（後進国移行期革命）

資本主義の矛盾を最初に感じたのは、農耕社会が崩れていく過程における農民であった。自らの生産する穀物が過剰生産状態にある（または交換の相手側においてすでに満たされている）ためにその交換価値が低い。故に他の人々（市民）と同じような生活をしようと

するならば困窮せざるを得ない。(相対的貧困意識) そして彼らは、金融資本家(地主・有力農民・市民等)に何等かの生活の糧のかわりに土地を手放し、小作へ転落していった。

ロシア、中国で社会主義革命が起こった原因是、上述のような状況の中に、生産性の高い生産手段またはそれによる商品が導入されたことによる。それによりその後進国内部に芽生えつつあった生産手段が、新たに導入された生産手段またはそれによる商品によって完全に破壊される。そして、その生産性が高いために就職できなくなる。(例、中国植民地化以前に、綿織物業は家内制手工業、マニュファクチャ段階まで発達していた。そこへイギリスにより生産性の高い綿製品が持ち込まれた。最初のうちは利潤、労働報酬を削って対抗できていたが、結局対抗しきれず破壊されていった。) また、多数の農民も穀物の交換価値が低いため困窮していく。これらにより大量の失業者がそこに存在し、地主・資本家の徹底的な搾取を受けていた。

以上のような状況の中で起こったのが、困窮しつつある農民、搾取されていたプロレタリアおよび小作人、失業者による、「市場経済による農耕社会から多元的生産様式への移行」ではなく、「計画経済による農耕社会から多元的生産様式への移行(後進国移行期革命)」である。

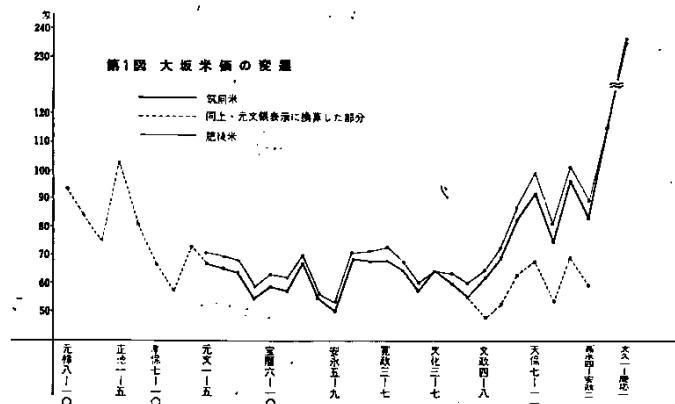
5. 日本・フランス・イギリス・ドイツにおける実証

最後に日本・フランス・イギリス・ドイツにおいて本稿の理論が成立するかどうか実証していく。

5. 1 日本の場合

日本において穀物の過剰生産が発生し、米価の急激な下落が生じたのは、江戸時代の享保期である。この頃を境にし、石高制を中心とした幕藩体制がゆらぎ始めた。

それでは、享保期における穀物の過剰生産と米価の低落をみてみよう。この実証は、山崎隆三氏が行っている。まず大坂米価の変遷のグラフを掲げる。(「近世後期における農産物価格の動向」 山崎 隆三氏より)



グラフ1 大坂米価の推移

グラフから明らかなように、正徳一年から享保十年にかけて米価の画期的低下が起きている。この原因は産米の増加によるがそれを示す文献の一部を引用しよう。

『寅（享保七年）五月より風雨之順能同秋諸国一統之満作仕候故段々下直に仕・・・故近年米之不足無御座年々古米相庭追年月下直に御座候・・・所詮は御仁政之至凶年無御座候上御開発之新田畠より作出候米穀之増加御江戸大坂え集り候故近年之下直と奉察上候御事』（享保16年10月大坂の米仲買から提出された言上書。「元禄・享保期の米価変動について」 山崎隆三氏より引用）

ここに示されているように、享保7年以降豊作続きの上に近年の新田開発により各地の産米が増大した。

ここで、享保の米価の低落による一つの現象として、身分制の強化についてみてみよう。18世紀になると、幕藩体制が動搖を示しはじめ、身分制が強化されたことはよく知られている。この原因については現在明確な論理はない。例えば、原田伴彦は共著、「部落の歴史と解放運動」の中で身分制の強化を凶作によるものとしている。しかし、本稿の理論からすれば、身分制の強化は凶作でなく米穀の過剰生産からくるものでなければならない。このことを実証するものとして広島藩の場合をあげておく。享保十一年の「家中不勝手につき知行免戻し、僕約を申渡す覚」の中に次のような一文がある。

『御勝手向之儀、近年御僕約被仰付候処、一両年に至り候而者米も下直に相成、第一御家中之者共及難儀候段難被捨置、御戻し米被仰付、弥増之御差間於江戸公儀御勤之儀者格別、御一家様方之御贈答等一切御断被仰、御国方に而者猶以稠敷御僕約可被遊与思召・・・』（広島県史より）

この享保十一年には広島藩において身分制の強化策として種々の僕約令が出されるのである。例えば、寺社方僕約令、郡方僕約令、江戸方僕約令、町方僕約令、かわた方僕約令である。

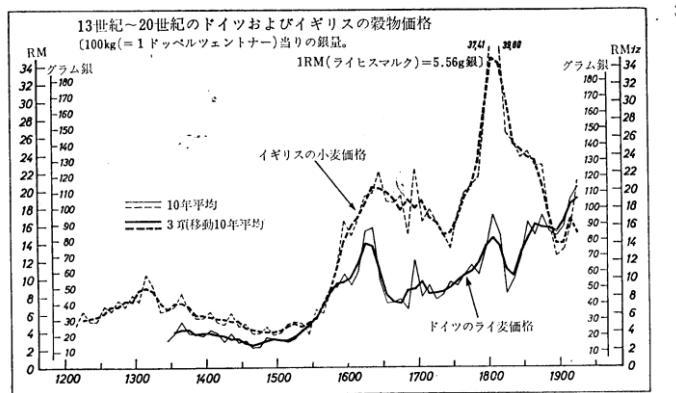
このようにして、身分制の強化は行われたが、やがて、これも維持できなくなる次のような現象が生じてくる。すなわち、小作・地主関係の成立、穀物生産から綿生産への移行、農村から都市への人口移動（後に「人返し令」も出される）である。

5. 2 フランスの場合

1630年代から1730年代に至る100年間は長期的「不況」の時期とされている。この原因是、穀物価格の長期的停滞ないし低落の中に求められるのが常である。「岩波講座世界歴史14 フランス絶対王政期の農村社会」で渥塚忠躬氏の引用したグラフを見てみるならば、このことは、明らかである。この時代の中で誕生したケネーが、農業を生産的部門とし、商業を不生産的部門と説いた（重農主義）ように、この時代のフランスは、まだ農業主体の国家であった。この中で、穀物価格の低落は、市民の土地の増加、農村の階級分化、農民の移動を引き起こしていくのである。

5. 3 イギリス・ドイツの場合

まず、「W=アーベル ドイツ農業発達の三段階」よりイギリス・ドイツの麦価の価格変動を示すグラフを掲げる。



グラフ2 イギリス、ドイツにおける麦価の推移

この麦価の価格の変動を整理すると次のようになる。

	1350～1550年	1550～1630年	1630～1750年
イギリス	下落	上昇	下落
ドイツ	下落	上昇	上昇

表1 イギリス、ドイツにおける麦価の変化

イギリスにおいて1550年から1630年の間、麦価の価格は上昇している。しかし、イギリスは、この間にエリザベス一世の絶対主義の時代を向かえ、トマス・モアが、「羊が人間を食う時代」と呼んだ第一次囲い込みが行われている。そして、この時代は価格革命と呼ばれる、メキシコやペルーの銀が、ヨーロッパに大量に流入し、物価が急騰した時代である。一般には、16世紀は新大陸からの貴金属の流入や商業・貿易の拡大により一般的「好況」にあったとされる。しかし、本稿ではエリザベス一世の時代は、穀物の過剰生産の時代であり、価格は上昇しているが、穀物の相対価格は低落していたと考えられる。これを実証してみよう。

農業保護法 (An Acte for the Maintenance of Husbandrie & Tillage) (1597年～1598年) より 『そして (エリザベス) 女王の治世第35年に、1つには当時、本王国において穀物が誠に豊富かつ廉価なる理由をもって、1つには本件に関して制定された法の不完全さと不明確さのゆえに、それらは廃止の止むなきにいたった。以降、耕地の牧場への転換により、それ以前のいかなる時よりもはなはだしき人口減少が生じるにいたつ

た.』(原典イギリス経済史より)

また、「囲い込みに対する各層の苦情」の中では、『ナイト：なぜなら、われわれがこの物価騰貴を経験するようになったのは穀物不足によってではありませんから。それに神様のおかげで穀物の値段は安く、しかもそうした状態がここ3年間つづいているのですからね。また囲い込みが家畜の値段の上がった原因であるはずもありません。というのは、囲い込みはなによりもほとんどの家畜を飼育するものだからです。とはいえ本当のことをいえば、あらゆるものの中の値段がおどろくほど高くなっていることは事実です。. . .』(A Discourse of the Common Weal of this Realm of England, edited from MSS. by the late Elizabeth Lamond, Cambridge, 1929, pp. 15~20 原典イギリス経済史より)

ここにみられるように、囲い込みが行われた理由は、穀物が非常に豊富であり、相対的に安価であったからである。この中で農民は耕地から追い出され、ナイトは、生活に困り、耕地を牧羊地にかえていったのである。

つまり、イギリスが多元的生産様式に本格的に向かっていったのは、穀物の過剰生産によるものであり、イギリス資本主義のはじまりは、物価上昇の中の過剰生産、スタグフレーションであったのである。そして、その後、19世紀になると、かの有名な穀物法論争が展開され、リカードは、比較生産費説を論じたのである。

これに対し、ドイツでは、1630年以降は穀物価格は上昇している。W=アーベルはこれについて次のように述べている。

『(穀物価格は)一六五一年から一七〇〇年までを一様に一〇〇とするなら、それに続く五〇年間(一七〇一~五〇年)には一〇二の平均価格となった。これはほんの僅かの上昇にすぎないが、外国における価格の推移と比べるならば、この価格の上昇は顕著なものといえる。なぜならば、イングランドでは、小麦の平均価格は同じ期間に八〇%に低下し、フランスでは八一%に下落しているからである。』(「ドイツ農業発達の三段階」 第二章 [一] の第四節)

ドイツのこの時代は「農業の世紀」(Ökonomisches Jahrhundert)と呼ばれている。イギリスが穀物生産から新たな商工業の時代へと移行しつつあった時代に、ドイツは安定した農業の時代であった。イギリスに対してドイツは遅れた農業国として位置づけられる。

すなわち、ドイツにおいては、過剰生産が持続せず、したがって多元的生産様式への移行は遅れたものと考えられる。

6. 結び

私たちは、歴史を学ぶ際に、飢餓史観とでもいうものによく出くわす。その代表的なものが、マルサスであろう。マルサスは「人口の原理」で「人口は幾何級数的に増加するが、食料は算術級数的にしか増加しない。」と述べた。それに対して、本稿ではまったく逆のことを述べた。どちらが正しいかは、読者の判断に任せるとしよう。ここでは、1960~70年代、一時の芳香を放ったマルクス経済主義者の言葉を、資本主義国家の戒めとして

引用する。

『(ヨーロッパ) 共同市場もまた、三〇万トンのバターと四〇万トンの牛肉類、一〇〇万トンの牛乳、数一〇〇万リットルのワインの在庫を累積させていたにもかかわらず、他方では、多くの貧しい家庭が一九七七年の「大晦日の祭り」を淋しく祝った。一九七三年に、ECで25万トンのリンゴが廃棄された。やや性急に「社会主義国」の「恒久的過小生産恐慌」を嘲笑するものは、過剰生産恐慌が、あらゆる非人間的な結果をともない、資本主義市場経済とは切り離せない事実を想起してみたらよかろう。』(エルネスト・マンデル著「現代の世界恐慌」第20章より)

以上をもって、本稿の結びとする。

7. 進化経済学会への寄稿によせて

私がこの論文を書くことができたのは、進化経済学を学んでいたからではない。しかし、進化経済学と本稿は密接な関係があると思われる。私は以下のように人間を規定する。

1. 「生きる」ために「生きる」。
2. 種族保存本能を持つ。
3. 自然を利用し生産手段を開発し使用する能力を持つ。
4. 自我を持つ。

そして、歴史経済を一元的生産様式から多元的生産様式へ変化したものとする。これは、物理法則でいえば、「エントロピーは時間とともに増大する」ことに対応する。この下で、歴史において「価値の逆転」があったと私は、1980年、20才の時述べた。封建制以前の村落共同体は、穀物は多ければ多いほど「価値」が増大したが、封建制の崩壊過程で、市場機構が作動し始め、穀物は多すぎると「価値」が減少するという「経済社会の進化」を見た。さらにこの「価値の逆転」を分解すると、一元的生産様式では、「自我の共同」が一般的であるが、多元的生産様式では、「自我の対立」が一般的である（市場機構とは「自我の対立」の集中的表現である）という、私の人間像に基づいた「経済社会の進化」を見ることができる。ただし、一部共産主義国家と呼ばれる、「自我の統制」の下にある国家も現存する。さらに情報、特に労働時間の伝達及び incentive あるいは motivation の問題等も絡んでくる。これは次回以降に述べることとする。

最後に述べたいことは、「進歩」に一般的価値などないのではなかろうか？ということである。そして、科学とは、エントロピーの増大法則に逆らって、言葉の構造により、複雑なものを単純なものに還元する作業である。

参考文献

- [1] アーベル. W. (1976) 『ドイツ農業発達の三段階』 未来社 三橋時雄、中村勝訳
- [2] アーベル. W. (1973) 『農業恐慌と景気循環—中世中期以来の中欧農業お

より人口扶養経済の歴史ー』未来社 寺尾誠訳

- [3] 浅香年木 (1971)『日本古代手工業史の研究』法政大学出版局
- [4] エルネスト・マンデル (1980)『現代の世界恐慌ー国際資本主義の動態分析』柘植書房 長部重康訳
- [5] 部落問題研究所編 (1976)『部落の歴史と解放運動』部落問題研究所
- [6] 浜林正夫, 篠塚信義, 鈴木亮編訳 (1965)『原典イギリス経済史』御茶の水書房
- [7] 広島県 (1973)『広島県史 近世資料編III』
- [8] ロストウ, W. W. (1974)『経済成長の諸段階 一つの非共産主義宣言』ダイヤモンド社 木村健康, 久保まち子, 村上泰亮訳
- [9] 遅塚忠躬 (1969)「フランス絶対王政期の農村社会」『岩波講座世界歴史14近代1』P209~P247, 岩波書店
- [10] 富永幸生, 鹿毛達雄, 下村由一, 西川正雄 (1978)『ファシズムとコミニテルン』東大出版会
- [11] 山崎隆三 (1963)「元禄・享保期の米価変動について」『大阪市立大経済学雑誌48巻4号』P96~P118
- [12] 山崎隆三 (1963)「近世後期における農産物価格の動向」『大阪市立大経済学年報19集』P109~P168

(注) 本稿は1985年に筆者が大同生命保険相互会社に在職中に執筆した論文『資本主義の生成と初期の構造 ~封建制から資本主義への移行理論~』のうち, 都合により歴史理論の部分を抽出し独立の論文としたものである.

The Birth of Capitalism
~Theory of the Transition from Feudalism to Capitalism~
Hiroaki Izumi

Abstract: This paper proves the following theory by new economical concepts.

Theory: The transition from Feudalism to Capitalism in an agricultural society is caused by the operation of the market mechanism on the overproduction of the chief grains when the exchange economy permeates both the feudal lords and peasantry.

In this paper we construct a new model from a historical side and substantiate this theory.